春季企画展

河内国府遺跡発掘100周年
―近畿地方先史時代考古学のはじまり―

山　口　卓　也

河内国府遺跡発掘100周年

河内国府遺跡は、古代河内潟の南縁、石川と大和川の合流地点の南西部段丘の北東縁部にある。1917（大正６）年、京都帝国大学の濱田耕作教授が、旧石器の在否確認を目的として調査し、想定外の縄文時代埋葬を発見して学界の注目を集めた。大阪毎日新聞社長の本山彦一氏は、玦状耳飾や縄文土器、石器、銅鏃、大量の弥生土器、古墳時代前期の土器などを発掘し、これが関西大学博物館の本山コレクションとして重要文化財や登録有形文化財となっている。

今年が、発掘からちょうど100周年となることを記念し、京都大学総合博物館や道明寺天満宮宝物殿、大阪府教育委員会の所蔵する河内国府遺跡発掘資料を、関西大学博物館に集めて、2017年４月１日から５月21日まで春季企画展「河内国府遺跡発掘100周年―近畿地方先史時代考古学のはじまり―」を開催し、会期中3,107名の来場者があった。

写真１　春季企画展　河内国府遺跡発掘100周年

「旧石器」が河内国府遺跡発掘の契機

今回の展示会で特に意識して構成・展示したのは、大正時代における旧石器時代人類への関心の高さと、末永雅雄先生が1955（昭和30）年に「近鉄電車大阪線関屋駅西南方石屑堆積地帯中」で採集した２点のサヌカイト製の「大形打製石器」の学史的重要性である。

1916（大正５）年、京都帝国大学の濱田耕作教授に、郷土史家福原潜次郎氏が収集した大形石器を喜田貞吉講師が紹介した。濱田教授は、それにヨーロッパの旧石器との類似を認め、国府遺跡の発掘を計画し、1917(大正16)年６月、国府遺跡の発掘が開始された。

1956（昭和31）～1957（昭和32）年に、末永先生が所長であった橿原考古学研究所が「二上山文化総合調査」を実施し、酒詰仲男同志社大学教授らが先史班を組織して、二上山を中心とした無土器文化の探査、二上山産サヌカイトの分布調査、大阪府側の河南町飛鳥周辺のサヌカイト産出地調査などを行ない、さらに国府遺跡の小規模発掘を行なった。末永先生自身が明示したことないが、国府遺跡の大形石器がサヌカイト製であることから、その原産地である二上山北麓に注目したこと、連続して国府遺跡を調査したことに、濱田教授の問題意識を継承した表れがあると推測できる。

末永先生の調査に続いて、東京大学の山内清男教授、鎌木義昌氏らによる発掘調査が行なわれ、砂礫層直上の黄色粘土層から土器を伴わない風化したサヌカイト製石器がまとまって発掘された。その技術形態学的特長が岩宿遺跡で発見され、東日本で類例が追加されつつあった旧石器に連なっていることから、近畿地方にも旧石器時代の遺跡があることが証明された。連続した調査には、末永先生から山内教授らへの示唆の存在を類推できるであろう。

従来の学史では近畿地方における旧石器時代研究は、この山内鎌木両氏の国府遺跡でのサヌカイト製旧石器の発見を始めとする理解が一般的であるが、そもそもサヌカイト製大形石器が礫層中から出土するかどうかということが、近

畿地方における旧石器時代研究の初端であったことや、濱田教授から末永先生への問題意識の継承があったということ、今年は大形石器が注目されて101年目、国府遺跡の発掘が始まって100周年であることも銘記されるべきであろう。

写真２　展示風景

近畿地方旧石器時代考古学その後の展開

国府遺跡で発見されたサヌカイト製旧石器が近畿地方から瀬戸内地方にかけて発見されるようになり、近畿地方の先史時代研究は、後期旧石器時代にまで拡大されることとなった。

近畿地方における旧石器時代の研究は、1980年代以降、近畿地方中南部の層位的研究環境の劣悪さを前提としながら、日本列島の後期旧石器文化の中に近畿地方の旧石器をどう位置づけるかという石器の形式学的編年・系統的比較研究が盛んに行なわれた。また、サヌカイト石材の開発と技術形態学的な構造化は、後期旧石器時代に起こった石器石材戦略的地域適応であったことが明らかとなった。

1980年代後半からは、全国的な件数と比べると数は少ないが、中国山地東部山間部に在地石材を主用する汎日本的な縦剥系の石器群の存在が認められ、これが姶良Ｔｎ火山灰の降灰が確認されたことと合わさって、瀬戸内系、中国山地系旧石器の接触動態と領域研究が行なわれ、旧石器時代の古民族学的動態研究の先行的試みも行なわれるようになった。近畿地方の旧石器はサヌカイト製が主体であるという固定的判断がぬぐい去られた過程は、近畿地方旧石器時代研究の展開において、大きな転換点であったといえよう。

一方、近畿地方北部の山間部低地にある湿原周辺や高原台地に見いだされつつある在地火山産出の火山灰堆積環境と層序は、後期旧石器時代にとどまらず、中期や前期といったより古い旧石器文化調査の研究的環境の基盤となる可能性が確かめられている。さらに、古瀬戸内盆地や古大阪平野においても、より古い旧石器は、非サヌカイト製石器を候補として探索すべきことが明らかになった。国府遺跡の大形石器への濱田教授、末永先生の注目が、ようやく焦点を結びつつあるといえよう。

国府遺跡における旧石器の在否が注目されて100年、近畿地方旧石器研究において、遺跡などの遺存環境は質も量も劣ってはいるものの、後期旧石器時代のみならず中期やより古い石器文化の在否解明についても、新たな展開を生み出す基礎的な条件は整ってきたと思われる。

写真３　兵庫県篠山市板井寺ケ谷遺跡の泥炭層と火山灰層

展示会を終えて

本山彦一の発掘隊が発掘した国府遺跡資料を蔵する当館は、今回の展示会を通して、近畿地方先史時代考古学のはじまり、旧石器時代研究の転機について再評価することとなった。これからも収蔵する国府遺跡資料の調査研究を進め、河内国府遺跡発掘100年の学史と、発掘した本山をめぐる事象、その時代の研究者間の交流についても調査を続け、その成果を発信していきたいと考える。

展示会開催に際し、ご助力を賜りました道明寺天満宮、京都大学総合博物館、大阪府教育委員会埋蔵文化財調査事務所、藤井寺市教育委員会、ご協力いただいた方がたに、厚く御礼申し上げます。

関西大学博物館学芸員